

非母語話者が日本語を書くとき

—「パラグラフ思考」と「文章の建築性」を中心に—

李 長波

【キーワード】

非母語話者、日本語作法、文と文の関係の階層、パラグラフ思考、文章の建築性

【要旨】

本稿は、読むことと書くことの関連性に注目し、日本語で語学、文学、歴史、文化などの分野の研究論文を書くにあたり、母語話者なら無意識、ないし半ば無意識的に行っているパラグラフ単位で思考する「パラグラフ思考」と、文章構成の全体性、立体性すなわち「文章の建築性」の構築を、非母語話者は日本語の文章を読む時から明確な意識のもとに「意識づけ」しなければならないことを述べた。そして、中井久夫氏の日本語作法の中から、「パラグラフ思考」の方法として、文と文、パラグラフとパラグラフの関係の階層と下位分類（18種類）の試案を提示し、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」構築の実例を示した。

1. はじめに

非母語話者のハンディには一方ならぬものがあるが、話し方に関して、聴く力の不足と同じように、書く力如何によっては、書かれたものの文章としての良し悪しは無論のこと、その伝達力が著しく左右されることも、いかんともしがたいところであろう。話すことに先行して聴くことを学習するのと同じく、読むことを書くことに先行させることが必然であろうと考えられる。

そこで、もし非母語話者にとって読むことの意味は何か、と問われれば、敢えて以下の二点を挙げたい。一つは言語感覚の味得、体得のトレーニングであり、いま一つはその言語の書きことばの息づかい、表現の機微、文体等々の文章力の習得、訓練、運用のトレーニングであろう¹。

この両者を根柢にて支えるものはほかならぬ思考力であることは言うまでもない。

¹ 言語感覚について「思考」とは、「思考」の拡大解釈ではないか、との批判もありうるが、非母語話者として、言語感覚への内省によって感覚の対象を明瞭な意識のもとにおいて理解するプロセスなくして、対象言語の十分な理解に到達し、対象言語の表現の息づかいと機微、そして文体を無意識的に運用することが出来ないと、筆者は考える。

本稿は、非母語話者が日本語を書くときに直面するさまざまな問題のうち、特に語学、文学、ひいては歴史、文化などの分野の研究論文を書くときに、日本語作法の一つとして、特にパラグラフ単位で思考する「パラグラフ思考」のための方法と「文章の建築性」構築の工夫に限って、実例を交えつつ解説するに留める²。

因みに、こういうことを書く筆者の日本語の文章力は、非母語話者としていまだ完成の域にはほど遠いことはいうまでもない。その意味で本稿の内容は筆者の一つの理想であり、中井久夫氏の、母語話者のための日本語作法に学ぶところから始めるのも、愛読の本から実例を選んだのも、一に管見の限りに過ぎない。

2. 中井久夫氏の日本語作法—私の読んだものの中から—

中井久夫氏は、言語学者でも日本語学者でもない。しかし、その日本語の言語感覚と日本語の文章力に並々ならぬものがあることは、氏の随筆や論文の愛読者ならずとも、認めるところであろう。

中井久夫氏の日本語作法で眼に触れたもののうち、主に以下の七点が挙げられる³。

- ① 中井久夫 1991a 「私の日本語作法」『中井久夫著作集第 4 巻 治療と治療関係』岩崎学術出版社、288-294 頁
- ② 中井久夫 1991b 「翻訳に日本語らしさを出すには—私見—」『中井久夫著作集第 4 巻 治療と治療関係』岩崎学術出版社、295-301 頁
- ③ 中井久夫 1992 「日本語を書く」『記憶の肖像』みすず書房、316-321 頁（初出：「出版ダイジェスト」1985 年 7 月 1 日）
- ④ 中井久夫 2002 「『起承転結』と『起承“承”結』—日米文化の深い溝—」『清陰星雨』みすず書房、235-239 頁（初出：『神戸新聞』2000 年 6 月 25 日）
- ⑤ 中井久夫 2005a 「手書きの習慣を保ちたい」『時のしずく』みすず書房、146-147 頁（初出：『本とコンピュータ』1999 年冬号）
- ⑥ 中井久夫 2005b 「日本語の対話性」『時のしずく』みすず書房、158-171 頁（初出：アエラムック『日本語文章がわかる』（朝日新聞社、2002 年 12 月）
- ⑦ 中井久夫 2010 「日本語文を書くための古いノートから」『私の日本語雑記』岩波書店、248-261 頁（初出：『図書』723 号（2009 年 5 月）岩波書店、30-36 頁）

上記七点のうち、①、②、③、⑥、⑦がもっとも日本語作法の参考になるが、わけて

² ここで言語学的に、表現以前（話し手・書き手が表現したいこと）と表現以後（表現されたことを聞き手・読み手が理解すること）の論を展開する余裕がない。興味がある読者には、泉井久之助（1970）の第二節「表現前塊と表現後塊」を一読していただきたい。

³ 中井久夫氏には、文章読本のような日本語作法の単行本こそないが、『私の日本語雑記』（岩波書店、2010 年）はその日本語観察と日本語作法の集大成である。

も、本稿にとって示唆的だったのは、⑦の次の二つのパラグラフである。

次にパラグラフと文章との関係に進む。この場合の文章とは、一つの論文などの全体を指し、一つのパラグラフは、一思想、一アイデア、一連の事態など、一つの定式で表現できるような内容を持ち、その前と後とで改行するものとする。論文は、文（センテンス）から成るのではなく、パラグラフから成るのである。その中では、事実や概念の単純叙述は長さの許容性が大きい。述べる順序は、イメージが次第にひらけてゆく道を行くようにする。ここでイメージとは頭の中の画に限らず、進行表や相関図式であってもよく、それらを眺めるのに適切な順序のことである。そして、全体として一つの建築のように組み立てる。論理的展開の部分は細かめに改行する。区切りが多いほうが読みやすく、考えてもらいやすい。展望や紹介はできるだけ簡潔に、短い文で述べる。（中略）

さて、パラグラフにも、センテンスと同じく、並立、解説、敷衍、要約、休止、飛躍、反論、自問自答などの種類がある。もっとも、全部を揃える必要も、まして、それぞれを独立したパラグラフにする必要もなからう。ただ、パラグラフには導入、展望、紹介、叙述という区分けが加わるだろう。（「日本語文を書く古いノートから」『わたしの日本語雑記』250-253頁）

これを要するに、「パラグラフ思考」は、「一つのパラグラフは、一思想、一アイデア、一連の事態など、一つの定式で表現できるような内容」を原則とすること、パラグラフ間の関係は、センテンス間のそれ同様、「並立、解説、敷衍、要約、休止、飛躍、反論、自問自答などの種類がある」こと、である。

これは母語話者を想定した日本語作法ではあるが、母語話者に比べて、非母語話者の場合、幼少時からの長い言語生活による裏打ちがない分、特段の努力が求められるであろう。非母語話者にとって、日本語の文章を読むときから、文章力の訓練として、文と文、パラグラフとパラグラフの関係を明確な意識のもとに置いて、書かれていることの全体を建築物のように理解するように心がけなければならない、とあってよい。

ここで、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」の意味を若干敷衍すると、まず、思考する対象（研究対象に言いかえてもよい）を正確な言葉によってとらえることに始まり、ついで思考もしくは研究対象の明瞭な全体像が描けるように、表現内容に含まれるべくして含まれる、語彙と語彙、文と文、パラグラフとパラグラフの関係に加え、さらにその全体性、立体性すなわち「文章の建築性」を「意識づけ」する学習の過程を通過しなければならない。そして、文章を書くとき、文と文、パラグラフとパラグラフの関係を明確な意識のもとに置いて、「文章の建築性」の構築を心がけつつ文章化しなければならない⁴、に尽きようか。

⁴ 管見の限り、思考のための基本概念の意味と関連概念間の関係を正確に把握するためには、遠藤嘉基・渡辺実（1961）が最も参考になる。特に関連する概念間の関係を図式化して示す明解さは、他に類書を見ない。

3. 「パラグラフ思考」と「文章の建築性」の構築

次節以下、非母語話者として日本語の文章を読み、書くとき、こういった種類の文と文、パラグラフとパラグラフの関係を「意識付け」するか、「文章の建築性」を構築するためには、具体的にこういった方法がありうるか、事例を交えて見ていきたい。

3-1 文と文との関係の階層と下位分類

前述のように、「パラグラフ思考」とは、パラグラフ内の、文と文の関係を、非母語話者の思考において明瞭に「意識づけ」することである。そのためには、文法範疇としての接続詞の下位分類だけでは文と文との関係のすべてが網羅できないので、ここでより詳細な下位分類を含めた階層関係を示しておきたい。図1はそれを図式化したものであるが、未完成であり、試案のまま大方の批判に供したい。

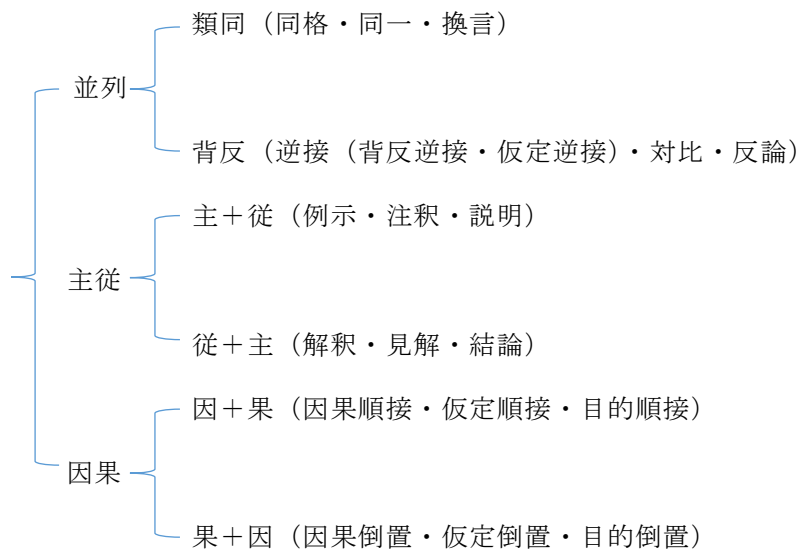


図1 文と文の関係の階層と下位分類 (試案)

以上 18 種類の文と文、パラグラフとパラグラフの関係を、非母語話者が日本語の文章を読み書きする際に、明確な意識のもとに理解し、そして表現することが、母語話者以上に求められているといえる。非母語話者として「パラグラフ思考」を身につけるためには、まず、これらの関係の下位分類に対応する接続詞、接続表現、あるいはそれに類する表現の多様性に触れなければならない。それは論文や本、しかも良い論文、良い本を読むことによってしか達成できないといっても、かならずしも過言ではない。

3-2 「文章の建築性」構築の実例

本節は、本稿の読者の研究分野を考慮し、国語学の分野から一つ、中井久夫氏の専門分野である精神医学、ただし精神医学そのものではなく、精神医学史の分野から一つ、事例を取り上げたい。

3-2-1 阪倉篤義『語構成の研究』第一編第一章第一節の構成

国語学の分野の実例は、阪倉篤義『語構成の研究』第一編第一章第一節「語形成論と語構造論」である⁵。

まず、阪倉篤義『語構成の研究』第一編「語形成論の方法」第一章「語形成論の分野と立場」第一節「語形成論と語構造論」の構成を図1に示す。

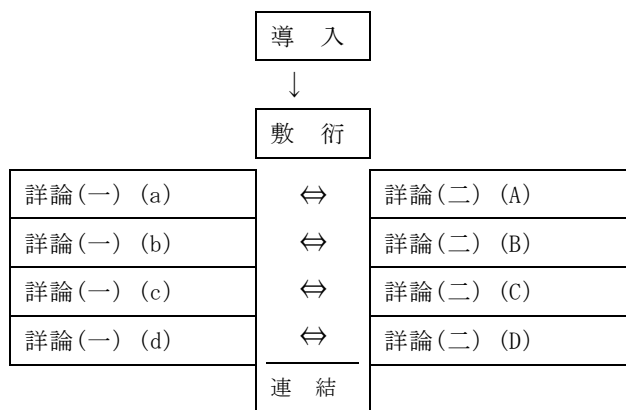


図 2

この図2は本文の骨組みだけ取り出したものであるが、これにパラグラフ（Pと略称する）を組み込むと、全体の構成が、図3のようによりはっきり見えてくる。

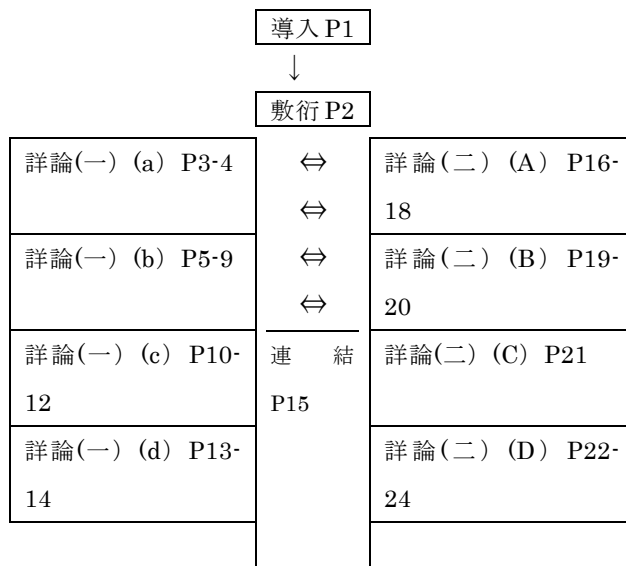


図 3

⁵ このテキストを選んだ理由は、分量的に 16000 字程度であり、表と注が四つずつあることに加えて、文章構成上のさまざまな苦心がなされている意味で、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」の見本として読者の参考になると考えたからである。

ここで作者の苦心のしどころをあえて一箇所挙げるとすれば、「導入」と「敷衍」に分けた P1 と P2 が二段構えにして且つ同一の導入部としているあたりであろうか。

この図 3 に、パラグラフとパラグラフの関連性に着目して、更に先に述べた「パラグラフ思考」に即して、各パラグラフの先頭に用いられる表現を組み込んでみたのが、次の図 4 である。

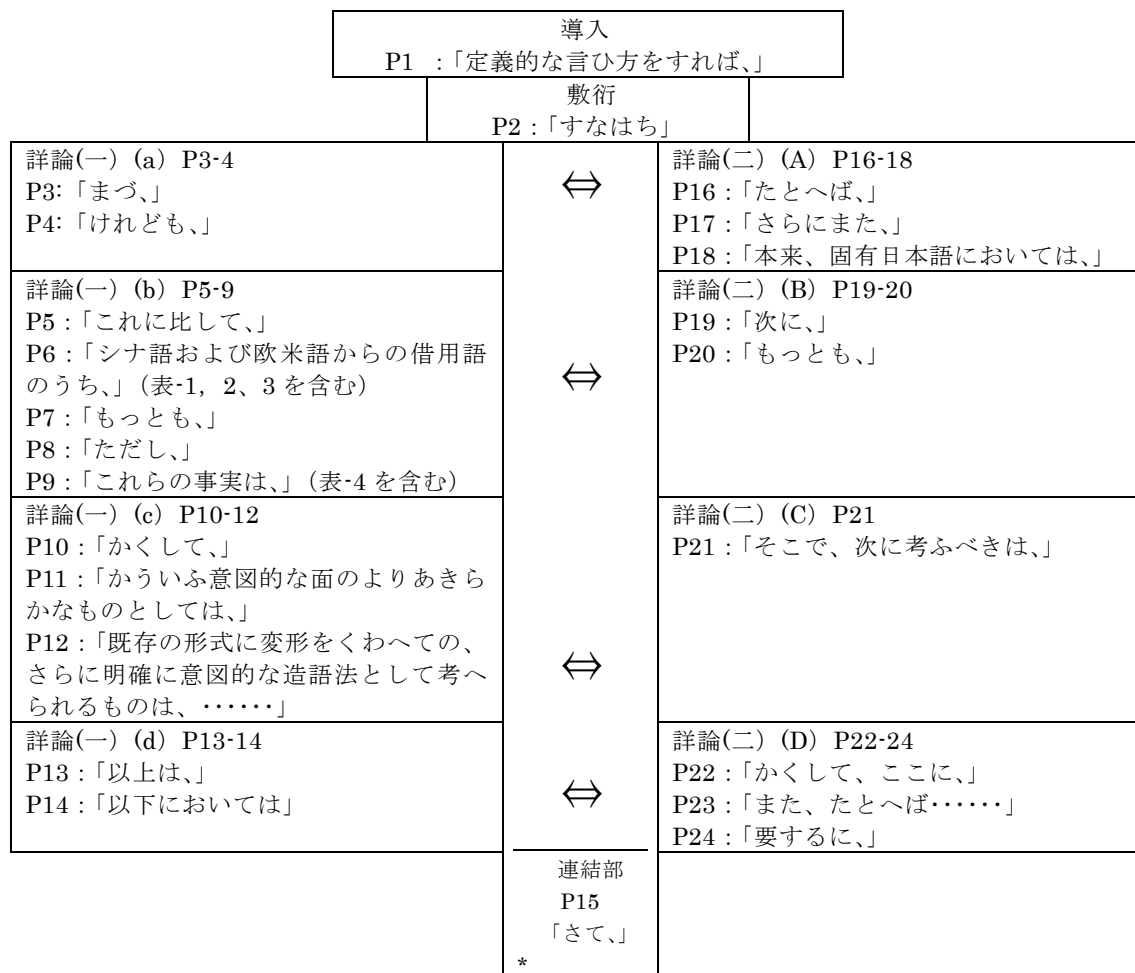


図 4

* P15 の連結部の全文は、「さて、造語といふ実践的な立場において考へられる、みぎのやうな種々の語形成論上の問題 (a・b・c・d) にほぼ対応するかたちで、一方、観察的な立場にたつての、語構造論上の問題 (A・B・C・D) が考えられる。」である。連結部 P15 の前に、P13、14 によって先行内容をまとめ、そして次へ話題を移していく工夫も看過できない。

詳しくは、原文についてご確認いただくとして、ここで、このテキストの構成を見ると、まず、全体的な「起承転結」の構成の中に、詳論 (一) P7: 「もつとも、」と P8: 「ただし、」、詳論 (二) P23: 「また、たとへば……」がパラグラフの先頭にあるように、詳論 (一)、(二) の中でも「起承転結」の運び方を含ませる工夫がしてあることに注目してよい。

この「転」にあたる部分は、著者自らが弱みを見せるようなものでは決してなく、む

しろ視野の広さを示す恰好な見せ場であり、初歩的な疑問もこれによってあらかじめ防げる、というメリットも捨てがたいところである。

将来はどうなるか知る由もないが、日本語学、日本文学、歴史などの分野の研究論文では、「起承転結」の文章構成はまだまだ有効であると考ええる。

それからもう一つ、本論は詳論（一）（二）の二部構成のために、一見、テキストの最後に「結」がないように見えるが、これは、P13 と P24 がそれぞれの「結」をなしていることに加え、原文は、『語構成の研究』の第一編「語構成論の方法」第一章「語構成論の分野と立場」の第一節であるために、次の節「第二節 語構成論の立場」に「開かれた」形こそ相応しかつたのであろう。単独の論文なら、「おわりに」を持つてくるところである。

最後に、この実例はたまたまパラレルの二本立ての内容を持つために、図2のような構成になっているが、単独の論文の場合、もし序章・終章（おわりに）を除く三章構成の論文のばあい、2+1 または 1+2、1+1+1 の構成となることはいうまでもない。そして、序章の最後に、上記構成のいずれかを予告したり、このテキストの P13、14、15 にならってそれぞれの章の終わりにしっかり次の章への受け渡しをしたりしておく、などの工夫がされていると、論文内容がより読みやすくなるものと思われる。

ここで、3-1 節「文と文との関係の階層と下位分類」で述べた「パラグラフ思考」の観点から改めてこのテキストを見てみると、段落内の接続表現が数的に少なく、段落の冒頭の接続表現が目立っているのは、パラグラフ内の文と文との関係はその内容、キーワード間の関連性によって保証されていることの結果と思われ、パラグラフの冒頭に接続表現を用いることが、もし非母語話者の躊躇するところだとしたら、大いに参考になるところであろう。

もちろん、P6 と P12 のように、パラグラフ間の関係がキーワードによって結ぶことも在り得るし、P9、P11、P22 のように、承前指示の指示語を用いることもパラグラフ間の関連性に役立つものであろう。逆にテキストのようなパラグラフ間の関連性を確保しつつ、パラグラフ冒頭の単調さを避ける苦心とも読み取れなくない。

3-2-2 中井久夫「西欧精神医学背景史」第一章「古代ギリシア」の例

前節の実例はパラグラフ間の関係、論の展開という観点から選んだものであるが、「文章の建築性」の構築を示すのにいっそう好都合な実例は、中井久夫「西欧精神医学背景史」である。

まず、その第一章「古代ギリシア」の本文から図を三つ示す⁶。

⁶ 図1は20頁、図2は21頁、図3は22頁より引用した。図1の読み方であるが、まず図のタイトルから読み始めて、それから図の中央から実線の→に沿って読んでいって、左右そして、一番上のテキストボックスまで読み進むのがよいかもしれない。関連テキストは図を読んでから読んでもよいが、逆の順に読んでも構わない。

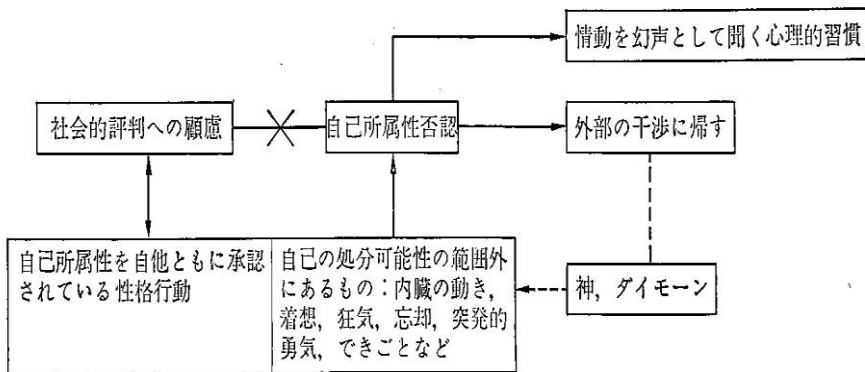


図1 ホメーロス時代の心理構造 (おもに Dodds により著者作成)

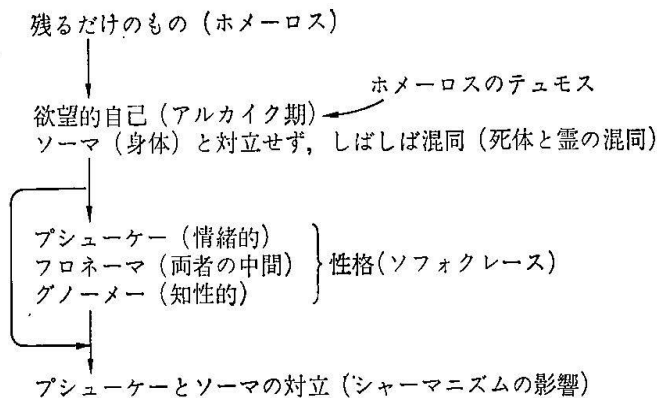


図2 ギリシアにおけるプシューケー概念の変遷 (おもに Dodds により著者作成)

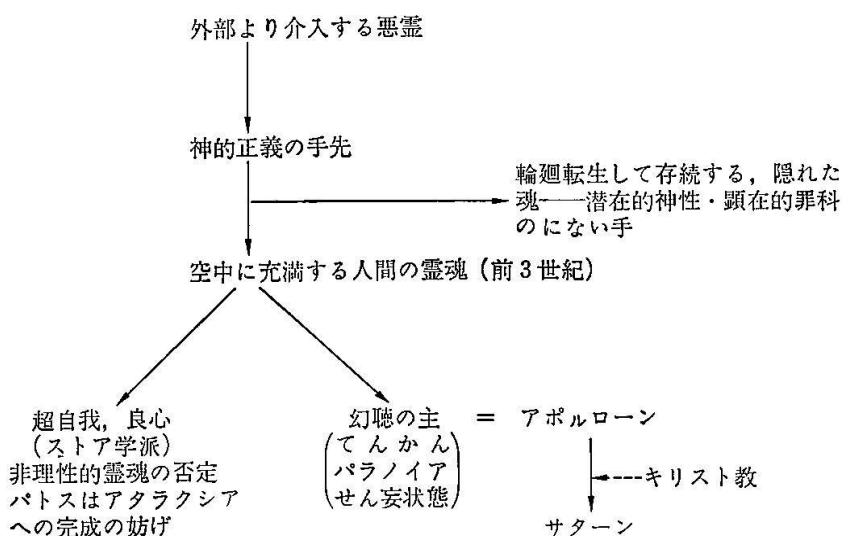


図3 ギリシアにおけるダイモーン概念の変遷 (おもに Dodds により著者作成)

このとおり、立てつづけに表を三つ並べただけでも、図のタイトルから、概念間の関係、事物、事柄間の関係、テキストボックスからボックスへと読み進めていけば、テキストの内容が一目瞭然のごとく、すなわち文章の立体的、全体的、建築的イメージとして視覚に訴えつつ一つの全体として読者の脳裏に焼き付けられる効果観面といえようか。

これらの図を見てから、あるいは見ながら、本文を読み進めていけば、本文の内容理解も、おそらくほぼ著者の示した図のような構造的性をもって読者の脳裏に、格段に正確にそして立体的に思い浮かべられるのではないか。そして、これらの図に関連するテキストの部分は極めて簡潔な表現からなるパラグラフであることにも、両者の相乗効果が顕著に現れている。「広範な分野の研究書を渉猟し、一行の裏に一本の論文、一冊の本をこめるように構築された、異色の精神医学史」（1999年11月、みすず書房刊新装復刊帯）⁷と、うたわれる所以である。

因みに、先行研究の読み込みにも図式化を用いたことは図3のタイトルの示すとおりにあるが、おそらく中井久夫氏はこれらの図を描いたあとに、本文の執筆に取りかかったものと思われる。

3-2-3 本稿執筆のプロセス—自分の失敗とわずかな経験から—

パソコン上で日本語の文章を作成するには、多数の優れた編集ソフトのお蔭で、かなり恵まれた環境にあることはいうまでもない。ただ、パソコンに入力するというのを、従来の手書きで書くのと同じにして語るには、筆者は戸惑いを感じずにはいられない。

両者の違いの最大のものといえば、従来の筆記用具を使つての文章作成が手の動作であるのに対し、パソコン上の日本語入力は指の動詞に限られる上、変換の操作によって思考は中断を余儀なくされ、思考と表現のシンクロニシティが損なわれかねないことではないであろうか。

日本語作法に即していえば、書きやすさ、修正しやすさにかけては、手書きはパソコン上の日本語入力の比ではないが、それが裏目に出て、思いついたらすぐパソコンに向かい、ついつい気軽に書いてしまいがちであることはないであろうか。

本稿執筆のプロセスを振り返ってみても、一番時間がかかったのは、手書きのカード作成とカードに書き記したキーワードや簡単なメモを、どういった順番で、どういうキーワードを中心に展開して行くか、そして全体の構成をどう組み立てるか、構想を練ることであった。

その間、最初に書き留めたキーワードの取捨選択があり、「はじめに」の書き方が二転三転してなかなか決まらなかった。これは一つの失敗であるが、中には、キーワードからパラグラフへ成長したカードもあった。

具体的には、カード（C）を、ホワイトボード（W）に、マグネット（M）で並べて、数日の間眺めていながら考え、各節の骨組みと全体の組み立てに時間をさいた（（自称

⁷ 「一本の論文」は、原文では「一行の」となっていたところを、文意に即して訂正した。

「C&WM 法」)。

その次は、図 1～図 4 の作成にかかった。理想はもちろん高く、前節の実例のような立派な図を目指したが、遠く及ばなかった。

それぞれの図に関連するテキストは、図が完成した後に、図の解説として、手書きのカードを元書き加えた、というよりは、手書きのメモを横に、入力した、といったほうが精確かもしれない。そうして出来上がったのが初稿である。

最初の原稿を作成する際の最大の教訓は、図が多いために、一つ一つが二頁にわたらないように図の配置に苦慮したことであり、テキストはその前後の空白にぴったり収まる量に調整しなければならなかったことであった。

初稿を書きあげたあと、改めて書いた内容から骨組みだけ取り出して、全体の構成を練り直しては、書きたしたり、パラグラフ間の関係を再吟味しながら修正したりした。この第二稿はほぼ完成稿に近いものであった。

その後、文法的なミスがないか、そして文体の統一に注意し、複数回読み直しては修正を加えた。

最終原稿は、わざわざ縦書きにして打ち出してまで校正することはしなかった。執筆用テンプレートのおかげである。

4. おわりに

本稿は、母語話者なら無意識的、ないし半ば無意識的に行えるような、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」の構築を、非母語話者は、それを明確な意識のもとに「意識づけ」することを余儀なくされることを前提に、「読むこと」によって言語感覚の味得、体得、日本語による高度な思考能力を身につけることに役立つことを述べた。そして、日本語学、日本文学、ひいては歴史、文化の諸分野のうち、特に国語学と精神医学史の分野の著書から、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」構築の実例を示した。

Reading maketh a full man; Conference a ready man; and writing a exact man. (Essays and Apothegms of Francis Lord Bacon, The Walter Scott Publishing Co. Ltd. P.147) と、フランシス・ベーコンはいう。

ベーコンの言う“full man”には「満ちた人」などの訳語が当てられ、“exact man”も「正確な人」と訳されるが、筆者は、この一文を「読むことは人の精神を豊かにし、話すことは人を機敏にし、書くことは人を厳密にする」と訳したい。ここに言う「人の精神」は非母語話者に限らず、人間の精神、わけても人間とその思考の幅の謂いである。

読むことの意義はことさら説くまいが、読む対象の幅、その幅に伴う多様性に比例して、言語感覚、パラグラフ感覚、日本語作法が培われるのであってみれば、専門内の論文、関連分野の書物、ひいては一見関連がないような分野の書物、あるいは小説、随筆なども、必ずその人の日本語能力、日本語による厳密な思考能力を向上させるに違いない。高さも深さも、幅があつてのものであり、幅の広さに比例するからである。

一方、以上のような考えに対し、母語話者、非母語話者を問わず、紙媒体の活字で本

を読むこと自体徐々に言語生活から遠のいていきつつある現状と今後の趨勢に鑑みれば、いかにも後ろ向きに過ぎるのではないか、との批判は当然あり得るであろう。

しかし、筆記用具が筆から万年筆に変わろうとしていた大正時代において、すでに泉鏡花は、「万年筆を使ふ人にろくな文章を書く人はみないね」と言っている⁸。

パソコン上の文章作成の、抗いがたき線条性の吸引力と粘着力によって、研究論文の内容の如何に関わらず、論文の立体性、全体性、すなわち建築性が失われてしまいかねないのだとすれば、論文作成段階の作業の最大の留意点は、文と文の関係を明瞭な意識のもとに置きつつ、パラグラフ単位で思考すること、すなわち「パラグラフ思考」であり、この「パラグラフ思考」という日本語による高度な思考能力を身につけ、そして研究内容の立体性、全体性、すなわち「文章の建築性」を「意識づけ」することであろう。

そのためには、非母語話者は、日本語を書く前に、否、日本語の文章を読むときから、「パラグラフ思考」と「文章の建築性」を強く意識してかかることが、どうしてもとめられなければならない。しかも、多数のジャンルの、多様の文体の文章を、幅広く読むことが、日本語の書きことばの能力向上に資することは、もはや言を待たない。

謝辞

本稿は、先に開かれたさいたま言語研究会主催の国際シンポジウム「学術論文としての書き言葉の能力を如何にレベルアップできるか——日本語の学習者からの提言——」（2023年1月27日、於埼玉大学人文社会学研究科）で口頭発表した内容をもとに書き下ろしたものである。非母語話者として日本語でものを書くときのさまざまのことについて考える貴重な機会を与えて下さった主催者に、心より感謝申し上げたい。

参考文献

- 泉井久之助（1970）「言語学」『言語の世界』筑摩書房，7-36頁（初出：『言語教育科学』第5巻，広島，1967年）
- 遠藤嘉基・渡辺 実（1961）『新編現代文事典』中央図書
- 阪倉篤義（1965）『語構成の研究』角川書店，5-23頁
- 登張竹風（1934）「明治時代の思ひ出」『人間修行』中央公論社
- 中井久夫（1979）「西欧精神医学背景史」『現代精神医学大系 第一巻 A 《精神医学総論 I》』「精神医学の歴史と現況」中山書店，19-124頁
- 中井久夫（1991a）「私の日本語作法」『中井久夫著作集第4巻，治療と治療関係』岩崎学術出版社，288-294頁
- 中井久夫（1991b）「翻訳に日本語らしさを出すには——私見——」『中井久夫著作集第4巻，治療と治療関係』岩崎学術出版社，295-301頁
- 中井久夫（1992）「日本語を書く」『記憶の肖像』みすず書房，316-321頁（初出：「出版ダ

⁸ 登張竹風（1934）、212頁。傍点は原文。

イジエスト」1985年7月1日)

中井久夫(2002)『起承転結』と『起承“承”結』——日米文化の深い溝——『清陰星雨』み
すず書房, 235-239頁(初出:『神戸新聞』2000年6月25日)

中井久夫(2005a)「手書きの習慣を保ちたい」『時のしずく』みすず書房, 146-147頁(初
出:『本とコンピュータ』1999年冬号)

中井久夫(2005b)「日本語の対話性」『時のしずく』みすず書房, 158-171頁(初出:アエ
ラムック『日本語文章がわかる』朝日新聞社, 2002年12月)

中井久夫(2010)「日本語文を書くための古いノートから」『私の日本語雑記』岩波書店,
248-261頁(初出:『図書』723号(2009年5月)岩波書店, 30-36頁)

(同志社大学日本語・日本文化教育センター教授)